

「学び」が拓く未来の医療

今号で『Primaria』は創刊1周年を迎えました。
創刊1周年に際し、発行の理念に共感してくださった方々から
弊誌に贈られたエールの言葉をご紹介します。



「弱さ」を知ること、謙虚になれる。 その謙虚さが本当の 「強さ」を生み出す。

政策研究大学院大学教授／東京大学名誉教授

黒川 清氏

私が読み返している本に、『ベルツの日記』があります。同著の中には彼が在日25年の祝賀会(西暦1900年11月)での、「日本では科学の成果を引き継ぐことで満足し、この成果をもたらした科学の精神を学ぼうとしない」という忠告が収められています。私はたびたび、この言葉を噛みしめます。当時からの科学に対する教育、研究の制度のあり方が本質的に変わらず、延々と「家元制」がつづいているからです。

日本では、科学の世界に限らず、物事の根底にある精神を本人に考えさせ「独立」した人材に育てようとする指導者は非常に少ない。それだけでなく日本の学生は、偏差値の高い大学への進学が人生の勝者になることにつながると刷り込まれています。したがって、いわゆるエリートと呼ばれる人々はテストで高得点を獲得できるとの意味で頭は良いのですが、反発心を持ち合わせている人は稀。精神的支柱を持たず、実体験に乏しく頭でしかものを考えられない「エリート」たちが、予測できない状況や危機に対峙すると基本的な弱さをさらけ出してしまうのは必然とも言えるのです。しかし、多くはこの弱さを自覚していません。

グローバル化が言われる中、日本で「開国精神」が培われないのは、均一性の高い「タテ」社会、「タテ」組織の中核にあるエリートたちが、弱さに気づかないゆえに生ずる慢心により他から学ぶ姿勢を持たないためです。このまま

では、日本は急速に変化する世界の動きの中で取り残されていくでしょう。

そこで、将来の医療界を担う『Primaria』の読者の方々に強く言いたい。若いときに「独立した個人」として違った環境に身を置いてほしい。敷かれたレールを歩むのではなく自ら望む道を進むもよし、自力で海外に渡るのもいい。自分の弱さは外に出て初めて認識できます。弱さを知ること、謙虚になれる。そして、その謙虚さが本当の強さを生み出します。加えて、「日本／自分」をより大きな枠組みで感じ取れるようになります。

世界から日本がどう見えるかを意識しながら考え、発言し、行動する変革者としての医師が増えることを願ってやみません。『Primaria』の表紙を飾ってきた先生方は、挫折を乗り越える気概が、肩書への執着心よりまさる、真の強さを持った方々ばかりでした。ぜひ、今後も後進のロールモデルとなるすばらしい人物をとり上げ、若い医師に刺激を提供してください。

創刊1周年、心からおめでとう。

参考：(1)黒川清：東京大学2013年度入学式祝辞(<http://kiyoshikurokawa.com/wp-content/uploads/typepad/201304121121.pdf>)、(2)黒川清：巻頭言「日本の科学と精神」応用物理2014年5月号、PP. 345-346(<http://www.jsap.or.jp/ap/>)、(3)宇田左近著、黒川清解説：「なぜ「異論」の出ない組織は間違うか」PHP出版、2014年